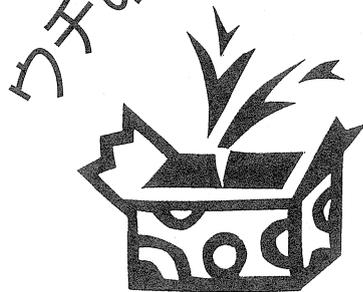


うちの図書館 お宝紹介!

第47回
鳥取大学附属図書館



キュリー夫人の手紙

國本雅通

鳥取大学附属図書館では、図書館報や毎年の公開展示を通じて、所蔵する貴重資料や郷土資料を紹介しています。それらの多くは、旧鳥取縣師範学校から受け継いだ江戸から明治にかけての郷土関係の資料ですが、今回は当館にとって特異な資料といえるこの手紙を紹介したいと思います。

1. キュリー夫人について

キュリー夫人については、夫人の次女エーヴ・キュリー等の書いた数々の伝記がありますが、まず、簡単な興信録を示します。

マリー・キュリー (Marie Curie : 1867-1934) は、ワルシャワ生まれのフランスの物理学者、化学者。ポーランド名をマリア・スクロドフスカ (Marya Skłodowska) という。1891年、学業を修めるためにパリに出、その後苦学の末に夫となったピエール・キュリー (Pierre Curie : 1859-1906) と共に放射能を研究した。1903年には「放射能の研究」によってノーベル物理学賞を夫と共に受け、次いで1911年には「ラジウムおよびポロニウムの発見とラジウムの性質及びその化合物の研究」によりノーベル化学賞を受賞した。数少ない女性の受賞者であり、2回にわたる受賞者でもある。全生涯を放射能の研究にささげ、その研究と教育に大きな功績を残した放射線科学の開拓者である。

2. 手紙の内容とその背景

このたび紹介する手紙の内容は、キュリー夫人がミス・ロイに自分がかつて滞在した南フランスの保養地のペンション (長期滞在用ホテル) の女主人のために利用客を増やすための依頼をしたもので、彼女の友人を思うやさしい心が伝わって来ます。ミス・ロイが彼女のどういう関係の人物かは

よくわかりませんが、恐らく終生変わらぬ友情で結ばれたアメリカ人ジャーナリストのウィリアム・ブラウン・メロニー夫人が取り持つ縁で親しくなったフランス在住のアメリカ人ではないかと想像されています。次ページの写真のように、夫人の直筆は繊細な美しい文字で綴られており、この手紙には、一緒にそのペンションの絵はがき (場所は南フランスのコートダジュール) が添えられています。

この手紙の書かれた1929年3月は、夫人は61歳を越えており、放射性物質障害で亡くなるちょうど5年ほど前になります。エーヴ・キュリーの書いた伝記の年譜によると、この年、夫人はニューヨーク婦人クラブ連合会メダルを受けたほか、ポスナン科学同好会名誉会員 (ポーランド) など六つの称号も授かっています。次のページに手紙の原文と訳文を掲載しますが、夫人の私生活の一端を知る上で大変興味深い資料といえます。

3. 所蔵の経緯

ところで、なぜ、鳥取大学にこの手紙があるのでしょうか。この山陰地方はすぐれた温泉がたくさんあることで有名ですが、なかでも鳥取県中部の三朝温泉は世界有数のラドン (ラジウムが放射壊変してできる元素) 含有量を誇る温泉としてよく知られています。地元の三朝町では、ラドンの含有量が世界有数だとわかり、それが一躍有名になったことから、ラジウムの発見者キュリー夫人の偉業をたたえ、そして遺徳をしのぶ催しとして、毎年8月のはじめに「キュリー祭」を開催しています。しかし、このことと本学にある手紙との関係は直接にはなく、ただの余談に過ぎません。

この手紙は、1977 (昭和52) 年秋に本学農学部の

前身である鳥取高等農業専門学校農芸化学科1942(昭和17)年卒業生の三宅輝武氏(当時、倉敷市在住)より本学創立30周年を記念して寄贈されたものです。そのときの同氏の手紙には、この全国唯一のキュリー祭が催されている地元の大学にふさわしい資料と考えてこれを寄贈すると書かれています。同氏が、キュリー夫人とラジウム、ラジウムと三朝温泉、三朝温泉と鳥取大学を連想されたなかで、夫人の偉業を母校の後輩に身近なものとして知らしめ、それに続くことを願って寄贈されたこの資料を、地域の大学図書館として大切に永く伝えて行きたいと思っています。

当館は、既に鳥取県立図書館をはじめ鳥取市立

中央図書館、米子市立図書館と図書館利用の相互協力に関する協定を締結し、地域への連携の強化と相互協力に努めています。今後、この手紙も含めた資料展示を共同開催するなどして、いっそう連携を深めて行きたいと考えています。

最後に、この紹介文を書くにあたって、本学名誉教授の中島路可氏が「鳥取大学附属図書館報 Library no.79」に掲載された「キュリー夫人の一枚の手紙」を参考にさせていただきましたことをお断りしておきます。

(くにもと まさみち：鳥取大学附属図書館)
[NDC9：090 BSH：稀書]

パリ、1929年3月

ミス ロイ様

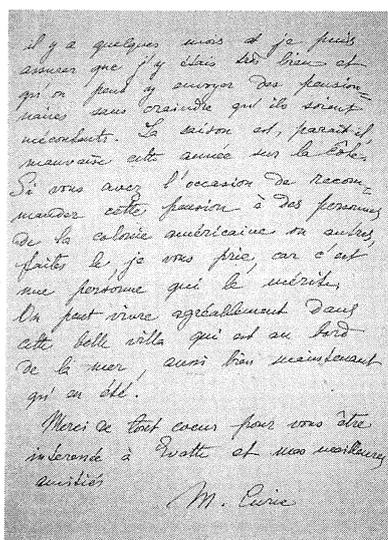
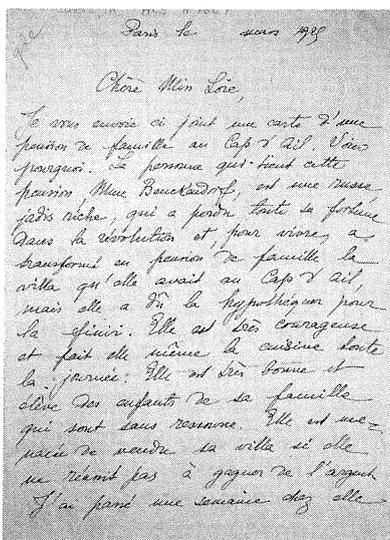
カップ・ダイルにあるペンションの絵葉書を此処に同封しお送りいたします。というのは、このペンションの経営をしているボイケンドルフ夫人はロシア人で、昔はお金持ちだったのですが革命で全財産を失い、生活のためにカップ・ダイルの別荘をペンションに変えたのですが、この建物を抵当に入れなければなりませんでした。夫人は大変活発な方で、一日中自分で料理を作っています。とても善い人で、無一文の家族の子供たちの面倒も見ておられます。もし、利益をあげられないと、夫人はこのペンションを手放さなければなりません。私は数ヶ月前に彼女のペンションに一週間ばかり宿泊しましたが、大変気持よく過ごすことができました。そこで過ごす人が不満足な思いを持つのでは、という心配は全くないと思います。

今年はこの海岸地方での滞在者は少ないようです。彼女はとても善い人なので、もし、フランス在住のアメリカの人々やその他の方々にこのペンションをご紹介いただく機会がありましたら宜しくお願いします。この美しいペンションは海辺にあり、夏と同じように気持よく過ごすことができると思います。

スベットに関心をお寄せいただき感謝しております。

私の最も深い愛をこめて、

M. キュリー



▲キュリー夫人がミス・ロイにあてた手紙(右はその訳文)



▲同封されていた絵はがき